

寄稿

医療・福祉現場で働く

聞こえない人たちの

声

-10-

臨床工学技士の渡邊いちこです。45歳で、群馬に住んでいます。左右70dBの中等度の難聴で、補聴器を装着し、生活や仕事の面で様々な支障があります。

臨床工学技士という資格は、一言でいうと、「医療機器の専門医療職」です。病院内で、医師・看護師や各種の医療技術者とチームを組んで生命維持装置の操作や医療機器がいつでも安心して使用できるように保守・点検の担当をします。私は一般病棟のように密閉していない場所では言葉が聞き取れるのですが、手術室や心臓カテー

テル室、集中治療室のように、密閉され、音の反響がある場所で聞き取ることが非常に困難でした。

周囲の協力はありましたが、「医師や他のスタッフの指示が聞

臨床工学技士の働き、

一対一の会話を大切に

こえなかったり、聞きとれなかったりして周囲に迷惑をかけてしまうのでは」の不安や「ミスをしてはいけない」等の思いがどんどん大きくなり、ストレスや自信喪失につながっていきました。

私は患者さんと会話することが好きで、病棟内を巡回し、機器を点検しながら人工呼吸器を使用し、声が出せない患者さんとも読唇や文字盤、筆記等で語らったりしていました。そして、「自宅で人工呼吸器や他の医療機器を使いながら生活している患者さんのお役に立ちたい」「今後は在宅医療・

介護の場で臨床工学技士も活躍できるはずだ」と思うようになり、昨年10月に新天地として重度訪問介護事業の会社に転職しました。

現在は、患者さんと一対一のコミュニケーションを大切にしたい働きができています。より自分の聴力・得意分野・専門性に合い、気持ちよく働ける場所を見つけたいことが大事と実感しています。